

ともしび

8 月 号

教如上人の東本願寺別立

上 場 頭 雄

(教学研究所属託研究員)

はじめに

皆さんお早うございます。本日は「教如上人の東本願寺別立」という講題で、本願寺が東西に分かれた経緯をお話させていただきたいと思っております。私は歴史の分野を少し勉強してきましたので、そういう歴史的なお話をさせていただきたいというところであります。

現在、京都駅の駅前には、東本願寺と西本願寺とが分かれて存立しているという事実が厳然としてあります。それで一般の方にも、「どうして本願寺は東と西に分かれたのか」という、単純な疑問があるわけです。

私は講題に、「別立」と書きましたけれども、一般には「分派」と言われます。「分派」は、「派を分かつ」ということです。そして、「分かつ」のは誰かというところ、一般的には、これは徳川家康であるところ、こういうふうな単純に図式化していく。ですから、観光バスのガイドさんなんかは、「徳川家康が本願寺の勢力が大きすぎるので二分した」というような説明をします。家康の当時、本願寺の勢力が大きくなっていったので、その勢力を弱体化するために二つに割ったのだと、一般的によく言われるのですけれども、歴史的な事実としてはそういうわけではありません。

結論的に言えば、第十一代・顕如上人(一五四三～一五九二)とその妻・如春尼さま(一五四四～一五九八)ですが、この方たちとその長男・教如さんという親子、これが対立したということです。また、それにしたがう末寺のグループ、つまり教如上人を支持するというグループ、それから顕如さんを支持するグループ、こういうグループに本願寺教団が分かれていった。このように分かれた教団を徳川家康が結果的に追認した。そして、いまの東本願寺の寺地を家康が寄付した、こういうことが結論的なことです。

それでは、なぜ親子対立していったのか。そのきっかけになりましたのは、いわゆる石山合戦(元亀元年(一五七〇))というのがありますけれども、これは本願寺教団と織田信長が対立して戦いました。その石山合戦を終結させるにあたって顕如上人と教如上人の意見が対立して、それで教団が分かれたということでもあります。

いわゆる石山合戦というのは、元亀元年から十年間にわたった合戦であります。合戦と申しますけれども、当時の一般的な合戦と少し違いますのは、当時は上杉謙信とか武田信玄とか、毛利元就とか、あるいは織田信長、

今川義元などという群雄が割拠している時代です。そういう戦国大名は、権力、領地というものを拡大していき、天下を統一しようとして戦ったわけですけれども、本願寺は合戦と言いましても、親鸞聖人の御影をいかに守護し、聖人の教えをいかに護持していくか、相続していくかということでもあります。そのために時には門徒の方々も弓や槍、あるいは鉞や鋤をもつて弾圧してくる勢力と戦った。その根本には、何と言っても、法義を相続していく、御真影を護持していくという考え方があられるわけなんです。

本願寺教団の勢力

教如上人が生まれたのは永禄元年(一五五八)で、二歳のときには、桶狭間の合戦がありました。この時期、本願寺は門跡寺院になり、勢力が大きくなっておりました。俗な言葉で言えばお金持ちになった。というのはこの頃、本願寺は寺内町というのを形成しています。ここでは、租税が免除されていましたし、そして、権力が入ってこない。営業も自由にしていたわけなんです。

寺内町には全国からご門徒が寄って来られます。宗祖や歴代の御命日には、加賀、紀州、尾張、三河、各地のご門徒が数多く上山します。また、番衆と言われる人たち、たとえば三十日番衆といって、宗祖の御命日の二十八日を期日として、一ヶ月間本願寺を番しに来ます。また真宗門徒には、商人とか手工業者、運送業の人とか、農民以外の人たちもたくさんご門徒のなかにおられました。

そういうご門徒や手工業者など、寺内町にたくさん集まってきたということとは、ここに技術とか、富が集積してくるということですから。本願寺は、軍勢力、経済力を持つことになりました。そこへもってきて、念仏者・同行としての団結があります。これらは当時、織田信長などが天下を統一しようとするときに、目の上のたんこぶになるんです。

それで信長は、矢銭、つまり軍事資金の名目で大坂本願寺に五千

貫の銭を要求します。堺には二万貫要求しました。本願寺はいちおうお金を出しますけれども、さらに信長は、寺地を退去するようにという要求を突きつけてきます。顕如上人はそれを拒否しまして、そこに合戦が始まってくるわけです。

顕如上人は第十一代でありまして、妻は如春尼と申します。如春尼は、三条西公頼の娘でありまして、その姉は武田信玄の奥さん。二人の姉は、当時、機内随一の戦国武将、細川晴元に猶子に入っています。こういう関係で顕如さんは、反信長の勢力、浅井、朝倉、あるいは武田信玄と親戚関係でありますし、同盟関係を結んでおります。そのような背景がありまして、顕如上人は全国のご門徒に対して、本願寺が退転なきように檄文を送ります。そして、合戦に立ち上がったということなんです。

石山合戦と信長

教如上人は石山合戦が起こった時は十三歳です。ですから十年間続いた石山合戦の期間は、十三歳から二十三歳という、いわば多感な頃で、元服から大人になる時期に、常に信長と対立しているという、そういった環境の中で育っておられるわけです。そして、お父さんの顕如上人を補佐しておられた。だから教如上人は、信長がどういう人物なのか、信長軍がどんな戦い方をしてきたのか、よく見えておられたと思います。

天正八年(一五八〇)三月十七日、信長は起請文で和議の条件を出してきます。たとえば、お盆までに大坂本願寺の寺地を退去して欲しいとか、あるいは、信長の支配した加賀をお返ししますよとか、七カ条の条件を出します。これは、「勅命講和」と言いまして、朝廷がなかに入ったわけです。

じつは前年の天正七年十二月頃から和議の話が出ています。当時の正親町天皇の勅使として、庭田重保、勸修寺晴豊という方たちが本願寺と信長の間に入った。じつは本願寺も、天正四年の頃から

兵糧攻めにあつていましたから、もうこの頃には耐えきれない。毛利元就や輝元から兵糧米を運んでもらったりもしておりましたけれども、兵糧を満載した船が九鬼嘉隆によって阻まれるというようなことがあります。兵糧が絶たれてしまい、大坂本願寺はもはや持ちきれなくなっていたわけです。

話は前後しますが、信長は、「天下布武」という印鑑を用いました。「天下をあまねく武力で制する」という意味ですね。そこには、天下は自分に委任されたものだという考え方があります。

信長は、この印鑑を用いる以前には、「麒麟」の「麟」の字を変形させた字を花押として用います。中国では麒麟は実在しない動物ですが、中国の故事では、平和な時代に訪れる動物であり、これを用いるということは、信長の出現は世の中に平和をもたらす、自分は天下を委任されているのだ、こういう発想なんです。そして、信長以前の中世的な考え方、イデオロギーをすべて否定していく。

たとえば、石山合戦が始まった元亀元年には、信長は比叡山を焼き討ちにしています。この比叡山というのはほしい、平安時代から意のままにならないものの代名詞でした。一般的に言えば、比叡山は鬼門の方角にあたりますから、手をつけられないというのが当時の常識だったわけです。信長はそれを焼き討ちにした。そして、その頃から、信長は仏敵である、というような観念が出てきます。ですから、教如さんとしても、信長は法敵であるというような考え方を持っておられたのではないかと思います。

教如上人の立場

話を戻しますが、天正八年閏三月五日、本願寺と信長の間に朝廷が入り、本願寺側は信長の申し出を承諾するということが「血判の誓詞」を朝廷に出します。つまり、ここで講和ということですが、教如は籠城することを主張します。つまり、和睦に反対なわけです。

ここに教如上人が自分を支持する全国末寺門徒に宛てた書状があります。教如さんは、籠城するについて、その理由を書いていきます。

① 教如書状（天正八年閏三月七日付）

今度「あいつたすべし」無事すてに相調候二付、当寺信長へ可相渡分候。然者数代之本寺聖人の御座を彼輩（信長のこと）馬のひつめにけかさん事、一宗の無念なげき入計候。……た、ひとへに当流相統候て仏法無退転やうにと思事候。

② 蓮如上人已來数代之本寺聖人の御座跡を法敵に相わたし、永く彼輩のすみかとなし果へき事欺入候て…… ※（一）は筆者

①では、法敵・仏敵である信長軍の馬の蹄に御真影を汚されたくないのだと、②では、蓮如上人已來の法義相統が、「法敵」に断ち切られることは嘆かわしいことであると言う。教如上人としては、法義を相統していくことに対して、強い意志があるのです。

だいたい信長には、「表裏一心」があると教如上人は考えておられます。長島の一向一揆（元亀二年）で信長は、いったん和議をしておいた上で、ご門徒をことごとくで切りにしたり、あるいは、ご門徒たちは信長に明け渡すということ、逃げ出していくところ、柵で囲って火をつけたりと、ざっと二万人のご門徒が殺されたと言われます。そういう裏切りと言いますか、表と裏の二心があるのが信長であると、教如上人は考えておられるわけです。

もともと大坂本願寺というのは蓮如上人の大坂坊舎の跡です。山科本願寺が焼かれて、この坊舎に移ってきましたから、それ以来、この天正八年でざっと八十五年にもなります。ですから、全国のご門徒のなかにも教如上人の檄文に同調する人たちが出てきますし、下間頼童など寺侍にも同調する者が出てきます。そうして、この三月から閏三月にかけて教団が割れてきたわけです。

大坂本願寺からの退去

そのような状況を見てお父さんの顕如上人は、お盆までに退去するという和議の内容だったわけですが、いちちはやく四月九日には大坂を明け渡し、御真影をもって紀州の鷺森さぎもりに退去します。もちろん妻の如春尼、准如、その他、下間仲之、頼廉という人たちが一緒に退去するわけですが、一緒に行動しないのが教如上人と、上人を支持するグループです。ですから、もうここで教如教団というものが芽生えてきているという状況であるわけです。

教如上人は結局、五月から八月にかけて、足かけ四ヶ月、籠城されるのですけれども、最後まで持ちこたえることはできなかった。それで、教如さんは八月二日、先の関白だった近衛前久さかひひさひさに本願寺をあげて退去します。その直後、大坂本願寺は火をかけられて焼かれます。寺内町もろともに灰燼に帰したということなんです。

この後、教如上人はお父さんたちのいる紀州鷺森に向かいました。だいたいこの年の三月の時点で教如上人は義絶されていたのですけど、やはり親子ですからね。和歌山県の雑賀崎ざがさきというところから大坂の河内門徒に宛てられた教如上人のお手紙が残っています。「今、雑賀に来てのだけれども、お父さんに会えないのだ」と、そういう九月六日付の書状が残っております。つまり、少なくとも天正八年九月六日までには雑賀におられたということです。

そして、そこからどうしたのかということですが、じつはその後どこへ行かれたのかということとは分からない、とされています。近年の研究では、ほぼ分かってきているのですけれども、天正八年九月から天正十年六月二日にかけての二年間、教如さんは身を隠しておられるというかたちです。それでこの天正十年六月二日というのは、じつは本能寺の変で信長が亡くなっています。ですから、大坂本願寺がもう少し頑張っていたらどうなっていたか。もちろん、歴史に「もし」ということは言えませんが、

流浪期の教如上人

それで、教如さんは二年間、身を隠しておられる。ですからこの時期は「流浪期」と呼ばれます。ところが、この流浪期にあたる天正九年にも教如上人の名前で絵伝が下付されているのが見つかっています。岐阜県の郡上八幡安養寺に「大谷本願寺親鸞伝絵」という絵伝四幅が所蔵されています。裏書きは、天正九年三月二日付で、宛先は「濃州郡上安養寺常住物也、願主 釈乘了」ということで、これが釈教如の名前で授与下付されているのです。

親鸞聖人の御影像とか歴代の絵像、阿弥陀さんの絵像とかを下付する権限というのは、当時の門主(法主)なんです。それを教如が下ろしている。いわゆる流浪期ですけれども、教如上人は門主という立場で下付しているわけです。そして、顕如上人にはなく教如上人に求める門徒団がいたということです。ですから、教如教団というものが、すでに萌芽していたというのは、こういうことですね。

近年の研究で教如上人は、紀州雑賀崎から奈良を通って、そして湖東(滋賀県の琵琶湖の東側)を通って、そして湖北の伊香郡から、越前福井の大野の付近に入っていく。福井県の大野市から東へ行くと、そこで九頭竜川。その峠を下りますと、岐阜県の白鳥というところ。白鳥は郡上八幡の少し北側です。その白鳥をずっとのぼって庄川から越中富山県の城端に來ます。城端には教如を支援した善徳寺(城端別院)というお寺があります。ここには空勝くわかつという、教如を、大坂拘こま様のときから、支援している北陸の有力な人物がおります。

青木馨氏が明らかにしておられますが、三河の山間部から尾張、一宮にかけて、教如上人が天正九年ごろに下付された証如上人の絵像が九点から、十一點ほどあるとされており、実証しておられます。

三、四年前に出版されました『名古屋別院史』にも、尾張、一宮の近辺に教如さんが流浪期のように下付した絵像、御絵伝というものを紹介していますが、それだけ教如上人に求める門徒がたくさんいたということですから。今でも名古屋はお東のご門徒が非常に多いですね。教如さんを支持してきたところなんです。

秀吉政権と本願寺

そのうちに本能寺の変が起こり、信長が亡くなります。この知らせを聞いた教如上人は、一目散に和歌山の鷺森に行き、お父さんの頭如上人に詫び状を書きます。そして、親子和解をする。

この後、豊臣秀吉の時代になりますと、天正十一年に本願寺は貝塚に行きます。この貝塚から天正十三年には天満へ、そして、天正十九年にいまの京都へと少しずつ本願寺の寺基が移ってきます。

そして、文禄元年(一五九二年)十一月二十日、頭如上人が今で言う脳卒中で倒れられまして、二十四日にお亡くなりになります。そして、十二月十日に頭如上人のお葬式が行われまして、それでお骨が帰ってきましたね、この還骨の勤行を誰が勤められたかというところ、これが教如上人であったわけでありまして。

「秀吉朱印状」と言われるものがありますが、これは秀吉から本願寺新門跡に宛てられたもので、現在は東本願寺に残っています。

門跡(頭如) 不慮之儀、無是非次第、絶言語候、就中、其方総領(教如) 儀候間、有相続、法度以下、堅申付、勤行無怠慢、当家相立覚悟持、肝要候、然者、門跡本坊へ被相移、其方之屋形へ理光院(准如) うつし、北の御かた相副、……

極月十二日 秀吉(朱印)

本願寺

新門跡

※(一)は筆者

この秀吉の書状は文禄元年十二月十二日付ですから、頭如上人のお葬式の二日後に出されています。このとき秀吉は朝鮮半島に出兵

しておりまして、加藤清正、小西行長、石田三成等は朝鮮半島に渡っています。秀吉自身は肥前、今の長崎県と佐賀県のあたりにいてそこから手紙を送っている。これは言うならば、「総領儀相続」すなわち教如上人の継承を天下人(秀吉)が公的に認めたという書状であるわけです。

偽の譲り状

ところが、翌年の文禄二年、秀吉は大坂に帰ってまいりまして、こんどは有馬温泉に湯治に行くのですが、そこへ、教如上人の母・如春尼が「じつは、亡くなった夫・頭如上人から、三男の准如に宛てた譲り状があります」と言って、秀吉のもとに持って行くという行動に出ます。じつは、これは偽文書であると言われています。

譲渡状

大谷本願寺御影堂留守職之事、可為阿茶(准如)者也。先年雖書之、猶為後代書置之候。此旨於違背輩在之者、堅可加成敗者也。仍譲状如件。

天正十五亥丁曆極月六日光佐(頭如)(花押)

阿茶御かたへ

※(一)は筆者

「譲渡状」というのは、今で言う遺言状と同じことで絶対的なものです。ところが、如春尼が持ってきた「譲り状」は、当時の書札礼としては、譲り状としての体をなしていない、そういうものを秀吉に持っていったわけです。

秀吉は、日を改めて九月十五日になって、大阪城に関係者を集め査問をします。そこで秀吉は、教如は十年間だけ本願寺の門主を勤めなさいと、そして、この「阿茶」とありますのは准如ですが、十年経ったら准如に譲りなさいと、そして譲った後は、教如さんに三千石を与えるという、そういう裁定・条件を出すわけなんです。

それでそのとき、下間頼竜、あるいは粟津など、何人か教如上人

を支えた寺侍がいるのですが、そんな譲り状は見たことがないということ、秀吉に食って掛かります。すると秀吉は逆に激怒しまして、「教如は即刻クビである」と言ったわけです。

秀吉は、「秀吉証状」でこう言っております。

本願寺影堂留守職之事、親鸞聖人以来代代々証文、殊先師光佐（顕如）讓状、明鏡之次第、則殿下経、叡慮、雖為三男、任寺法之旨、光昭（准如）仁被仰付儀尤候、然者、勤行等、弥無懈怠可相励事、專一候也、

文禄式十月十六日（秀吉・花押）

本願寺殿

教如上人はこの翌日、「辞職納得書」というのを出します。先ほどの「秀吉朱印状」で見たとように、「文禄元年極月」に秀吉から門主と認められますが、十一ヶ月後には、こんどは三男の准如が後継者として認められ、教如上人は退かなければならなくなったのです。

ところで秀吉政権は、「讓渡状」を偽物と見抜けなかったのか、ということがありますね。しかし秀吉は、それが偽物であることを分かっていたのではないかと考えられます。

と申しますのは、秀吉政権は当初、千利休と秀長の派閥、それから石田三成の派閥という二つの派閥のバランスで成り立っていました。天正十九年に秀長が亡くなります。その直後に千利休は自害を余儀なくされます。そうすると、この二つの派閥のバランスは崩れて、石田三成のグループが秀吉政権の中核になるわけなんです。

教如上人という人は、千利休と非常に近い関係でした。千利休が茶会を開くとき、茶頭には教如上人をもつてくるのです。本願寺は、秀吉から天満に寺地をもらいますが、その前後に教如は利休と茶会を開いている。そして、そこには准如は行っていません。お父さんの顕如も行っていない。この天満の寺地を獲得するための裏工作も、教如は利休を通して行っていたと考えられます。そのこ

とを面白く思っていなかったのが、石田三成のグループだったと思うのですね。だから、「讓渡状」が偽物だと分かっているが、こういうことをやったのではないかと考えられます。三成は教如上人を快く思っていなかったのです。

大谷本願寺の釈教如

文禄二年に教如上人は隠退させられました。しかし、この隠退期においても、教如さんは門主の権限を行使しています。この時期に下付された親鸞聖人の絵像の裏書きがあります。

大谷本願寺釈教如（花押）

文禄五年四月十八日

親鸞聖人御影

越前国吉田郡藤島郷

願主 釈慶善

いま、この文禄五年には、すでに准如に譲っています。しかし、この願主・越前の釈慶善という人は、教如に下付を求めています。もちろん、この人ひとりがそうしたのではなく、この人は今で言えば寺院の住職であって、そこにはご門徒がたくさんおられるわけです。そのご門徒も承知のうえなのです。教如上人の隠退期に、下付された絵像の類は、現在、四十点あまり確認されております。

金龍静氏によりますと、この時期の教如上人は、親鸞聖人の御影を下付する際に見えた裏書きのように、「大谷本願寺釈教如」と書いておられるそうです。これは、自分こそが大谷一流なのだ、大谷本願寺を相続しているのは私であると、こういう意識があるのではないかと、いうことです。

次に、大阪難波別院に、文禄五年（一五九六）につくられた釣り鐘が残っております。その銘には、「大谷本願寺」と書いてある。つまり、隠退期にもう本願寺を建て始めているということなんです。

じつは、この文禄五年には、阪神淡路大震災ぐらいの規模の地震

が起こっています。だから、この時の大谷本願寺がどれくらい規模だったのか、実際に完成したものなのかどうか、それは分からないわけですが、すでにこの時期に大谷本願寺が建て始められていた。だいたいこの場所というのは、大阪城の目の前です。そして、この時には、現在の西本願寺はすでにありました。

それ以外にも、関ヶ原の合戦の前年ぐらい、慶長四年(一五九九)ころに、教如上人は正信偈和讃を印刷開版しておられます。それは、蓮如上人が文明五年(一四七三)に吉崎で開版されて以来のことです。正信偈和讃を印刷して、「釈教如」と書いてみんなに渡しておられるわけです。そして、それをほしがる人たちがいたということなんです。

だからもう、いちおう隠退ということなんですけれども、何ら隠退という意識はないわけです。自分が門主であるという、こういう状況なんです。

徳川家康と教如上人

そうしているうちに、慶長三年(一五九八)に秀吉が亡くなります。すると、教如上人は徳川家康に接近していきます。教如さんというのはずっと、信長や秀吉と渡り合ってきたわけなんです。それで、秀吉の次の天下人は誰かと、政治状況を読んでいるわけなんです。それはやはり、普通のただのお坊さんというわけではありません。

慶長四年(一五九九)、教如上人は徳川家康を訪ねています。教如さんは、慶長七年二月に今の東本願寺の寺地を家康から寄進されるのですが、それまでは隠退の身であります。ところが、慶長五年五月には大津御坊を建てます。直参門徒で大津商人の豪商たちが教如上人を応援しているわけなんです。そして、その人たちは家康と通じている。教如さんは、そうした人脈を活かしているわけです。

そして、同じく慶長五年七月二日、教如上人は下野国小山(現在

の栃木県)に向けて出発しています。そこでまた徳川家康と会見しております。この時から二ヶ月後に関ヶ原の合戦が起こるといって、そういう時なんです。そういう時期に何をしに徳川家康に会いに行つたのかということなんです。おそらく、家康は関西の石田三成等、豊臣の残党の情勢を聞き取ったのだらうと思います。教如上人にしてみれば、次の天下人は徳川家康に違いないと予測している。だから、家康に情報を持っていったわけです。

慶長五年九月十五日、関ヶ原の合戦が起こります。その五日後の九月二十日には教如上人は、大津御坊で家康を迎えています。その後も、伏見の家康を訪問したり、かなり行き来をしています。

そして、慶長七年(一六〇二)、家康から現在の東本願寺の場所に、寺地「方四町」を寄進されるわけですけれども、それにあたって、「宇野新蔵覚書」には次ぎのように書かれています。

合戦相済候て、大御所様(慶長五年九月)御上洛被成に付、教如様大津迄御迎に御出被成候時……、本多佐渡頭大御所様へ被申上候は、本願寺の家は余之家には替り申候、御上太閤之御代に二本に被成候、右之通に被成候而可然……、尤と御所様御うけ被成候而、其替りに此四町四方被進候。……

すでに秀吉時代には本願寺は二つに分かれている。家康(御所様)も、それも然るべきであると追認した、と。そして、「御所様」は、東本願寺の寺地を寄進した、ということ。家康が本願寺を二つに分かつたのでなく、すでに秀吉の頃から分かれていた。それを家康は追認したのだ、ということが書かれてあるわけなんです。

次に、慶長八年一月三日、上州厩橋、今の群馬県前橋市の妙安寺から御真影をお迎えします。妙安寺は、開基が成然という「親鸞聖人門侶交名牒」にも出てくる人です。ここに安置してあつた親鸞聖人のご木像をお迎えした。これは、親鸞聖人が関東から京都へお帰りになる時に、成然が大変に悲しんだので、聖人ご自身が自作の御真影を形見として預けられたという言い伝えがあります。もし

て、これが今現在、東本願寺にご安置されている御真影でありますね。

このようにして、教如上人の東本願寺が認められて、別立されたということになるわけです。そして、いわゆる教如体制というものをつくる。これは一番端的なのは、各地に御坊をつくります。今で言う「別院」です。地域教団の教化の中枢になります。

教如上人は、一貫して親鸞聖人の一流、あるいは大谷一流の法義を相続していく、あるいは本願を護持していくという、そのような中から東西に分かれていったのではないかと思えます。本日は、教如上人が、分派ということではなく、本願寺を別立していかれたというところでお話をいたしました。どうも失礼いたしました。

(うえば けんゆう)

二〇〇三(平成十五)年一月十九日

高倉会館日曜講演抄録

<彼岸会仏教講座のご案内>

[日 時] 9月21日(日)~23日(火)
毎朝6時30分から
7時40分まで

[会 場] 高倉会館
下京区高倉通り六条上る
(地下鉄) 五条駅下車南東
(市バス) 烏丸六条下車東

[講 師] 高岡教区大福寺住職
太田 浩 史

[主 催] 真宗大谷派(東本願寺)

クローシャ/さけび

krośa

腑に落ちないこと

「わかりやすくしゃべるとして仏教やなくなる。」

ある学習会で聞いた言葉に、私は納得できなかった。仏教は誰にでもわかるように語れるはずだし、ぜひそうあってほしいからである。まして、わかりやすく仏教を話してくださる方の発言だったから、ことさら腑に落ちなかった。

私も法事の席など、法話(感話)をすることがある。なるべく日常にありふれた言葉で話すようにしている。専門的な法話など到底できない私が、それでも何か話すのは、仏教に関心を持ち、ともに聞法会に足を運べたら...との思いからである。そのため、短く、わかりやすく、面白く、心に残る話をしようと思う。

このように考えていて、ハツとした。確かに仏教でなくなっている。話そうとしているのは、聞きやすい話である。「わかりやすい」を求めて仏教から離れている。「おおせにあらざる」こと、「弥陀の本願にあらざること」を話していたのかもしれない。一方、聞法会においても、都合のいい話だけを仏教として聞いてきた私に気がついた。私にとって、わかりやすい話だけが仏教であった。

なんと危ういところに立っていたことか。

腑に落ちないことと向き合うなかで、しらず、今まで見えていなかった私の姿が見えてきた。納得いかない、都合に合わないことだからこそ、そこに目が向いたのだろう。そこもまた「ありのまま」の私の姿であった。「ありのまま」の私が広がった気がした。腑に落ちないことと向き合うことは、「ありのまま」を知るのに大切なことだった。

そしてふと、私の都合を超えて、すべてを照らして下さっている仏をおもった。「腑に落ちないこと」が私に仏を感じさせてくれた。

(嘱託研究員 三浦 統)

教学研究所 メッセージ

五十八年目の敗戦の日を迎えて

今年も敗戦の日を迎える。

先の第二次世界大戦で敗戦国となつた日本は、国を挙げて被災からの復興に突っ走つてきた。その甲斐あつて、世界の先進国も注目するほど、短期間に経済力をつけ国民の生活水準が上がつたと言われる。「世界に追いつけ、世界を追い越せ」という合言葉に象徴されるような鼓舞と、それを支える共通した勤勉さによる賜物であろう。

しかし、戦後復興に伴う国際社会の中での日本という国の位置づけの確かめや、対外国との関係づくりにおいては、お粗末だったと言えるのではないだろうか。というのも、戦後五十八年の年月を経て、なおも未解決のまま放置してきたアジア諸国との戦争責任の問題をはじめ、確かに保護保障政策の傘下にあつて多くの利点を得たとはい

え、国内外の世論を無視してのアメリカ、イギリスによるイラク攻撃への支援決定など、戦争に懲りない面が表面化している。

一九九九年の「周辺事態法」に始まり、二〇〇一年にはアメリカの同時多発テロ事件を契機に「テロ対策特別措置法」が制定された。そして今年六月には

「武力攻撃事態法」をはじめ「自衛隊法」および「安全保障会議設置法」の一部改正という、いわゆる有事三法が成立、施行された。付帯決議として国



民保護に関する法制整備は向こう一年以内に行うものとなり、まず武力行使があつて国民の安全保障は後回しにされた内容になっている。

かつて日中戦争開始直後の一

九三八年に制定された「国家総動員法」のことが思い起こされる。旧憲法下ではあつたものの、国民の権利や財産の保護、また議会の権限が侵害されるなどの点で国会において反対意見があつたにもかかわらず修正することもなく決議され、この法律にもとづいて

敗戦までいろいろな統制令が発令された。戦時体制を作り立てて国民統制を加える手口には、このような前例がある。

私たちは、自分の属する「こちら」を守り、「あちら」には

「こちら」の領域を広げるために、「あちら」を敵と決めつけ、絶対服従を誓うまでやっつける。それでもなお造反の起こることを恐れ脅えつづける。それは限りなく無くならないにもかかわらず、払拭したいがために、限りなく戦いを繰り返す。そのたびに、やっつけられた側の反感と憎悪は増し広がっていく。対話が閉ざされれば閉ざされるほど、恐れや脅えが増大する。

今こそ戦いの勝ち負けによつて得るもの少なく、大きな戦いになればなるほど失つていくことばかりが多いことを知るべき時であろう。驕る者は久しく続かないという言い伝えがある。蓮如上人の「何ともして、人になおされ候うように、心中を持つべし。わが心中をば、同行の中へうちいでおくべし。」(御一代記開書)一〇八・真宗聖典八七五頁)の言葉を改めて肝に銘じたいものである。

